

# 明治時代における日本人の外モンゴル調査

ボルジギン・フスレ（呼斯勒）

## 1. はじめに

近代以降、日本とモンゴルは密接で複雑な関係をもっていた。明治時代の日本にとってモンゴルは、すでにたいへん重要な戦略的地域になっていた。明治時代には、日本からのさまざまな調査団がモンゴル高原をおとずれ、調査がおこなわれ、多くの資料が残されている。

明治、大正時代にかけて、外務省、参謀本部、満鉄の派遣をうけて、日本人が内モンゴルで実施した調査はきわめて多く、それらの調査は研究者によってよく研究され、ひろい範囲で知られている。同じ時代、外モンゴルをおとずれた日本人もすくなくなかった。原山煌氏が指摘しているように、1892、93年に、有名な情報将校福島安正が、シベリアを単騎横断した際、外モンゴルをも調査した。当時、「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」には、福島調査に関する記事が連載されただけでなく、それらは単行本『単騎遠征録』として出版された<sup>1</sup>。福島調査とそれによってもたらされた日本人のモンゴルについてのイメージの原像については、原山氏により詳しく研究されている<sup>2</sup>。20世紀初期における日本人の外モンゴル調査についても、しばしば研究されてきた。例えば、「大阪毎日新聞」の調査員竹中清（翠村）の調査（1908年）とその報告『蒙古横断録』は林紅子により紹介されている<sup>3</sup>。また、大正時代に入ってから、三井物産の大島清のフレー（現モンゴル国ウランバートル）での活動とその『庫倫出張報告書』は田中克彦氏<sup>4</sup>、宮崎嘉一の調査については二木博史氏<sup>5</sup>、児玉利正の外モンゴルでの活動はモンゴル国の研究者ボトバヤル氏により、それぞれ研究されている<sup>6</sup>。上記の研究はまた、大正時代の松井七夫、江副浜二、盛島角房、小野寺裕治、佐藤富江、小西茂等の外モンゴルでの調査についても触れている。

本論文は、これまでほとんど知られていない、あるいはあまり研究されていない、明治時代における黒田清隆・草政吉等の外モンゴルでの調査を中心に検討する。また、鳥居龍蔵の外モンゴルでの調査についても再検討したい。

## 2. 1886年におこなわれた黒田清隆の買売城での調査について

まず指摘しておきたいのは、福島安正より前、明治19（1886）年、黒田清隆等が北半球の諸地域を旅行した際、すでに外モンゴルの辺境の町の買売城（Mai Mai Cheng）をおとずれていたということである。さらにその一年前、黒田は内モンゴルのドローン・ノールにも足を踏み入れたことがある。しかしこれらのことについては、これまでほとんど知られていない。

黒田清隆（1840～1900年）は、薩摩藩士、軍人（陸軍中將）、政治家であり、第3代開拓長官、第3代農商務大臣、第2代内閣総理大臣（1888年4月30日～89年10月25日）、元老、逓信大臣、枢密院議長、班列などを歴任し、爵位は伯爵である。

よく知られているように、明治14(1881)年、開拓史官有物払い下げ事件で、黒田清隆は指弾された。同年10月、伊藤博文、黒田清隆は政変をおこし大隈重信を失脚させたが、黒田は開拓長官をやめて内閣顧問の閑職に退いた。

明治19(1886)年6月から明治20(1887)年4月まで、黒田清隆は、文部大臣秘書官小牧昌業、北海道庁理事官鈴木大亮、陸軍工兵大尉伊集院兼雄、非職外務省御用掛の市川文吉、郵船会社支配人前田清照、鹿児島県士族の寺田弘などを連れて北半球の諸国をおとずれた。一行は6月23日に東京を出発し、27日に長崎港に到着し、そこから300日あまりをかけて、釜山、ウラジオストク、ハバロフスク、チタ、イルクーツク、モスクワ、サンクトペテルブルク、イスタンブール、アテネ、ローマ、ウィーン、ベルリン、パリ、ロンドンをまわり、大西洋をわたって、アメリカのニューヨーク、ワシントンなどをおとずれた後、日本にもどった。そして、同年9月に黒田は伊藤内閣の農商務大臣に任命された。

東京にもどった黒田清隆は、すみやかにその旅行の日記を整理し、1887年11月に3巻本の『環游日記』として出版した。同日記のなかで、黒田は彼らがおとずれた各地域の地理や気候、鉱産、政治、軍事、商業、経済、住民、宗教、民俗などについて詳しく記録している。ここで特に、ブリヤートやカルムイクの人々、外モンゴルの売買〔買売〕城についての黒田の記録に注目したい。

黒田らは1886年8月18日にネルチンスクに到着し、翌日の19日にチタについた<sup>7</sup>。彼らはザバイカル州軍務知事やチタ市長、警部長らを訪問した。ここで黒田は、ヤクートやコリャーク、ブリヤート、カルムイク人のことなどについて、詳しく記述している。彼の記録によると、ブリヤート・モンゴル人(図1参照)はイルクーツク県、及びザバイカル州内のバイカル湖周辺に居住しており、1857年の調査では19万人で、1871年には25万人に達している(そのうち、ザバイカル州には16万2113人、イルクーツク県には9万1212人)。ブリヤート人は「成吉思汗〔チンギス・ハーン〕ノ時代ニ於テ頗ル勢力アリ(中略)、其容貌ハ純乎タル蒙古人ナリ」「職業ハ牧畜、獣獵、漁業、農業ナリトス(中略)、又鍛冶職、製革職、毛皮製造職等ヲ営ム者」もいるとし、黒田は、ブリヤート人は「頗ル富裕」であると指摘している同時に、その宗教、とりわけ仏教の同地域での伝来、発展について、詳細に紹介している(図2、図3は、『環游日記』に掲載されているブリヤート人の寺院と、チャムをおこなう僧侶たち)<sup>8</sup>。

一方、カルムイク人は当時、「蒙古、天山伊黎〔犁〕地方、南部悉比利諸県、“スタウローポリ”県、“ドン”州等ノ曠野、及高邱ニ游牧」して、「宗教ハ概ネ仏教ニシテ特ニ“ダライラマ”及僧侶ヲ尊崇ス又希臘教ヲ奉スル者アリト雖其数多カラズ言語ハ蒙古語ニシテ(中略)性質快活ニシテ致知格物ノ件ヲ好ミ」である<sup>9</sup>。黒田は、また、16世紀から19世紀までのカルムイク人のロシアとの複雑な関係、ボルガ河畔への移住、ヨーロッパへの遠征、ウバシが率いる一部(オイラト)によるイリへの帰還の紆余曲折の歴史をも詳しく述べている<sup>10</sup>。

8月21日には、黒田らはウェルフネウヂンスク(現ウランウデ)に到着した。ウェルフネウヂンスク市は当時市民4333人で、常備兵は347人、外国人60人がいた。同市では中国との通商をおこなっており、毎年1月25日から2月10日までに歳市を開き、1885年には衣類及び日用品、皮革などの貿易額は1万7025ルーブル、中国産の茶、絹布、毛布の貿易額は3万8115ルーブルがあった<sup>11</sup>。当時の基準からすれば、かなり大きな金額になっている。黒田らはウェルフネウヂンスクに一日滞在し、翌22日、同市の市長や警部長らと会見ののち、さらに南西部にむけてすすみ、セレンガ(セレンゲ)川をわたって、23日にトロイツコサフスクにたどりついた。

翌 24 日、黒田一行はトロイツコサフスクを出発して、恰克図（キャフタ）に到着した（図 4 参照）。

キャフタは清帝国の売買〔買売〕城（現モンゴル国アルタンボラグ市）と「相接シ百五十年来両国貿易ノ要区ナリ張家口ヨリ蒙古砂漠ヲ経紅茶磚茶ノ此口ニ入ル者百万ブード内外ニ至ル」。その広さは「方二町許四面倉庫ニシテ中間空地アリ荷造等ヲナス所トス」。あきらかに、キャフタは重要な陸路港となっている。黒田の記録によれば、1885 年、キャフタをとおして、ロシアから外国へ輸出した商品の金額は 457 万 4074 ルーブル 28 コペーキで、外国からの輸入は 1529 万 5976 ルーブル 31 コペーキである。ロシアから海外に輸出した物は主に食用品、製造品、雑貨などである。清帝国からの輸入品は茶と氷砂糖、菓物などとなるが、そのうち、紅茶、緑茶、磚茶などの茶類がもっとも多く、計 1290 万 9162 ルーブルにも達し、輸入額の 8 割以上を占めており、海外からロシアに輸入した茶は、ほとんどこの陸路港キャフタをたよっている。これとくらべ、モンゴル産の輸入品は主に食用品、雑品で、計 10 万 6549 ルーブルである<sup>12</sup>。

黒田らはキャフタをとおって、外モンゴルの買売城に入った。買売城の人口は、当時 3000 人あまりであった。黒田らは茶商の祥発永記、大升玉記をおとずれ、また、関帝廟に入り、観劇して帰った。『環游日記』には、キャフタから庫倫（フレー、現モンゴル国ウランバートル）、庫倫から張家口、張家口から北京までの距離、道にも触れている。偶然にも黒田はここで、1 年まえに張家口で会っていた



図 1

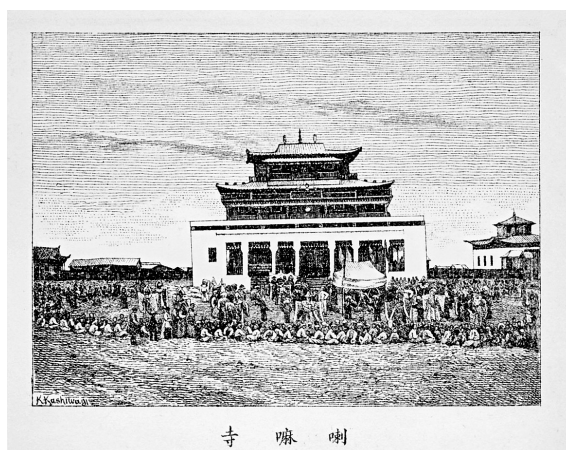


図 2



図 3

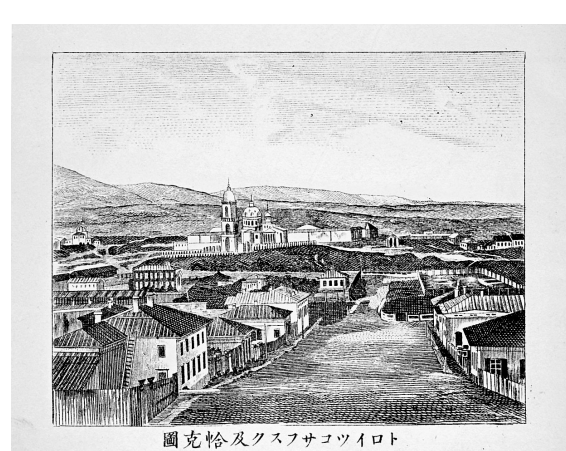


図 4

（図 1～4 出典：黒田清隆『環游日記』上編，1887）



ロシアの「商人」バツソフと邂逅した<sup>13</sup>。

いうまでもなく、黒田清隆の記録は、買売城、キャフタ、ウェルフネウヂンスク、チタなどの都市、ブリヤート、カルムイク人、及び小論では検討していないヤクート人、オロチュン人などの歴史、政治、交通、宗教、文化、生活環境などを理解するうえで、きわめて重要な価値をもっている。

### 3. 1905～06 年の草政吉、三浦稔、櫻井好孝の外モンゴル調査

明治 38 (1905) 年から 39 (1906) 年まで、日本外務省の派遣で、東亜同文書院の卒業生草政吉等 5 人が、それぞれ外モンゴル、新疆、甘肅省にて調査をおこなった。東亜同文書院は 1901 年に東亜同文会 (近衛篤磨会長) により中国で設立された日本人のための高等教育機関である。1902 年から 1944 年まで、同書院の学生ないし卒業生によりアジア大陸内地への調査が実施されたが、その数は計 5 千人にものぼるといわれている<sup>14</sup>。

明治 38 (1905) 年 4 月、東亜同文書院の卒業生草政吉等を外モンゴルや新疆などの地域に派遣することがきめられた。同年 5 月 9 日に、外務大臣小村寿太郎 (1855～1911 年) から在清日本大使内田康哉 (1865～1936 年) に宛てられた電報によれば、調査の目的は、清帝国辺境地域におけるロシアの動静やそれぞれの地域の情報を収集することである。その後、草政吉は外モンゴルの烏里雅蘇台 (オリヤスタイ) 地域、櫻井好孝は科布多 (ホブド)、三浦稔はフレー、林出賢次郎は新疆の伊犁 (イリ)、波多野養作は甘肅に派遣された<sup>15</sup>。

林出賢次郎、波多野養作の調査旅行はすでによく研究されているが<sup>16</sup>、草政吉、三浦稔<sup>17</sup>、櫻井好孝の外モンゴル調査についてはほとんど研究されていない。したがってここでは、草政吉等 3 人の調査を紹介したい。

草政吉と三浦稔の二人は 1905 年 7 月 20 日に北京を出発、5 日間をかけて張家口につき、そこで一週間ほど調査した。張家口には、ロシア人も経営にかかわっていると思われる和信洋行、阜昌洋行などの店舗があり、彼らは中国人をやとい 100 から 300 の牛車をつかい、張家口からフレー、キャフタ間の輸送をおこなっていた。草政吉と三浦稔は、8 月 2 日から、中国の商人に「小通道」とよばれる路 (すなわち張庫公路、張家口—フレー公路) に沿って旅行し、38 日後の 9 月 10 日に、フレーに入った。そこで半月間滞在したあと、草政吉はさらに西にむけて出発し、10 月 10 日にオリヤスタイに到着した。彼はオリヤスタイを中心に、東はフレー、南はサイン・ノヤン・ハン、西はホブド、西北は索果克までの地域で調査をおこなった。フレーにいた三浦稔は 1 回キャフタにも入ったが、おもにフレーを中心に情報を収集した。翌 1906 年 5 月 3 日、草政吉はフレーについた。同月 6 日、彼は三浦稔と共にフレーを離れ、6 月 2 日に北京につき、7 月 1 日に東京にもどり、16 日に外務省に帰着した。

櫻井好孝は、1905 年 7 月 17 日に北京を出発し、太原、西安をへて、9 月 26 日に蘭州についた。彼は 10 月 19 日に蘭州を離れ、12 月 20 日に新疆の哈密 (クルム、ハミル)、翌 1906 年 1 月 1 日に吐魯番 (トルファン)、11 日に迪化 (現ウルムチ) に到着した。迪化でしばらく滞在した櫻井は 3 月 17 日にふたたび出発し、23 日に古城につき、5 月 26 日に外モンゴルのホブドに入った。彼はホブドで 3 ヶ月間ほど調査したあと、8 月 21 日に出発し、同月 31 日オリヤスタイにつき、そこで 10 日間調査して、9 月 10 日に東にすすみ、10 月 5 日にフレーに到着した。同月 18 日、櫻井はフレーから出発し、11 月 3 日に張家口につき、22 日には北京にたどりついた。

3 人は日本にもどったあと、それぞれ報告書を提出し、外モンゴルの自然、環境、気候、鉱産、交

通、通信、政治、軍事、牧畜、経済、商業、住民、宗教、民俗、国際関係、清朝政府との関係、及びモンゴル人の対外認識、外モンゴルにおけるロシアの影響、日本がとるべき戦略などについて述べているが、3人が記述した内容、範囲はひろく、ここではその重要ないくつかの点に注目したい。

まず第1に、外務省からあたえられた使命でもあるから、外モンゴルにおけるロシアの活動は当然、3人の調査のもっとも重要な対象のひとつとなり、これについての記述はきわめて詳細である。三浦稔は、清朝の政治体制のなかモンゴルは事実上半独立国となっているが、歴史的、地理的原因で、ロシアと清帝国の勢力の交叉点となっているとみなしている<sup>18</sup>。同時に三浦は、ロシアがすでに外モンゴルでみずからの勢力を確立でき、またその勢力を拡大しつつけていることに対して、危機感をかくせなかった。彼は、日本政府は外モンゴルに対してけっして「拱手傍観」することなく、すみやかに適切な対策をとり、できるだけ早めにフレーに領事館をもうけ、常に人を駐在させ、ロシアの動きを監視しなければならない、また留学生を派遣し、モンゴル語を習得させ、モンゴルのことを熟知する専門的な朝野の人物、政治家を養成することを提案している<sup>19</sup>。彼はさらに、ロシアは遼東にいたる東アジア地域での権益を手に入れたという野心をもっており、いったんロシア人がモンゴル、黒竜江より南下し沿海州にでる策をとったら、その結果ははかりしれないほどの状態になると指摘している<sup>20</sup>。実際、のちの1945年8月、ソ連・モンゴル人民共和国連合軍は、モンゴル高原、黒竜江、沿海地域から一挙に日本軍を攻撃して南下し、日本軍をアジア大陸から退出させることができた。ソ連も遼東半島をふくむ、極東地域の権益を確保していた。

草政吉も外モンゴルにおけるロシアの影響力におどろいている。彼は、北京や山西など中国の商号の外モンゴルでの経営の規模をとりあげながら、ロシア人のフレー、オリヤスタイでの活動をとおし、てわかるように、ロシア帝国の勢力が大きく外モンゴルに浸透していることを強調し、清朝当局はオリヤスタイ衙門にたいして、「緩慢粗忽ノ処置ニ出テ彼等露国人ヲシテ機先ヲ制セシムルニ至リ」、外モンゴルは「全々露国ノ勢力範囲ニ陥」ってしまったと驚嘆している<sup>21</sup>。

櫻井好孝はその報告書で、ロシアは日露戦争で日本に敗れたが、外モンゴルと新疆での勢力の拡大をいそぎ、積極的に政治や軍事、経済、商業、交通などの分野での影響力を強化していると述べ、日本も外モンゴルに領事館を設立し、「最惠国条款ニ依リテ均霑ノ権利ヲ主張」すべきと提案している<sup>22</sup>。彼はまた、ロシアは「科布多境界条約」「烏里雅蘇台境界条約」などさまざまな不平等の条約をとおして、外モンゴルの土地を侵略しつつしていると指摘しているほか、外モンゴルにおけるロシアの商業活動、とりわけロシアが外モンゴルで設立した露清銀行（道勝銀行）を分析し、ロシアは表向きは清朝との貿易を促進するためこの銀行を設立したのだが、実際は、同銀行をとおして対モンゴル貿易の牛耳を執り、外モンゴルにおける清朝の影響力をおさえることが目的であったと述べている<sup>23</sup>。

第2に、三浦稔と草政吉はモンゴルにおけるチベット仏教の影響に注目し、モンゴルの政治を考察するには仏教が度外視できないことを強調している。三浦稔は、清朝政府は外モンゴルに対して「非干渉主義」をとりながら、やや複雑な政教行政機関を設置し、仏教を利用してモンゴル人の反抗を防ぐのに成功したとかがえている。彼の記述によれば、当時、フレーに住むモンゴル人のうち、7、8割が僧侶であり、ジェブツンダンバ・ホトクトは、ダライ・ラマとパンチェン・エルデニについて権威をもち、チベット仏教の3番目の指導者になり、モンゴル人にふかく尊崇されている。また、フレーはラサにつぐ霊地となり、僧侶たちが諸方からあつまってきて、「日々読経堂ニ上リテ念仏三昧ニ

耽り未来復活ノ幸ヲ祈願スルノ外何等ノ為ス事ナク悠遊自適スルノミ」であるとする<sup>24</sup>。

草政吉は、外モンゴルはチベット仏教の「勢力実ニ旺盛ヲ極メ」、清朝政府は、モンゴルの仏教に対して特別な保護政策をとり、モンゴル人の慍悍勇猛をおさめ、みな「温順ニシテ意気地ナシ」と述べている。草政吉の記述によれば、外モンゴル 86 旗のモンゴル人の 3 分の 2 強は僧侶になるが、住民全員が仏教徒である。ダライ・ラマはチベット仏教の「本尊ニシテ仏教上ノ釈迦ト同一体否其化身ナリト尊崇セラルル」とする。当時、モンゴル人に「ダライ・ラマと清朝皇帝は孰れが偉大か」と聞いたら、みな「ダライ・ラマが偉大」とこたえた。そして、1905 年 9 月、ダライ・ラマ 13 世がフレールを出発し、「帰蔵ノ途ニ上リシカ其数日前ヨリ千里ヲ遠シトセスシテ参拝スル蒙古ノ老若男女路ニ絡繹トシテ絶エス為メニ同地ハ往年曾テ見サル繁盛ヲ極メ」という状態になっていた<sup>25</sup>。ロシアもダライ・ラマをコントロールしようとする動きをみせている。またホトクト（活佛）等も「亦一部落ヲ有シ政令ヲ握リ其部下ヲ自ラ統御スル事殆ト札薩克〔ジャサグ〕ト異ルコトナシ」、ひいてはジャサグ（モンゴルの地方長官）などに参拝されるほどであった<sup>26</sup>。モンゴルにおけるチベット仏教の影響の一斑をうかがい知ることができる。

第 3 に、3 人はともに諸外国のモンゴルでの鉱山経営、貿易状況を考察し、外モンゴルにはまだ未開発の鉱山あるいはいまだに発見されていない鉱山がおおくあり、巨大な開発の潜在力があるとかんがえ、今後どのように外モンゴルを開発するかについて、それぞれ提案している。

三浦稔は、日本は率先して、外モンゴルで投資し、商業を創設し、立脚地を築くべきと述べ、このような投資は苦難や危険にみちているが、不幸にして失敗に帰しても必要であると強調している。具体的な案として、日本はフレールで「政商両性ヲ帯フル一大商店」を開設し、これを柱に資金を調達し、外モンゴルおよび国境地域の情報を収集しながら、こちらにくる外務省、農商務省のための留学生あるいは練習生の経費を提供し、日本の商社を誘致し、日本の商品を販売し拡張していくことを望んでいる<sup>27</sup>。

草政吉は、北京の永興恒、元生和、三和義、山西省の大盛魁、天義徳、元盛魁等の商社の外モンゴルでの経営、貿易を考察したほか、外モンゴルにおけるロシアの商業経営状況、とりわけ露清銀行の機能、ロシア人のヘンティー山脈での金鉱採掘などに注目した。彼は、日本も専門の人を派遣し、外モンゴル地域の商業およびそのほかの諸事情を視察し、製造、工芸品を輸出し、販路をひらくと同時に、モンゴルからの原料輸入もおこなうべきと主張している。草政吉はまた、ホブドでは桐生物産会社の綿繻子、大阪石川号の七子織、および漆塗の手箱、鏡、自動車など日本の製品が販売されていて、売れ行きがよいと述べている<sup>28</sup>。

櫻井好孝は、モンゴルの伝統的牧畜業を分析し、日本は清朝政府を説得して、モンゴル全土を開放させ、「内外資本家ヲ翕合シ一大蒙古牧畜会社ナル者ヲ設立」し、モンゴル人を使役し、もっとも先進的な牧畜方法を用いて経営したら、モンゴルの牧畜業はきつとますます拡張してゆき、モンゴルも世界有数の牧畜産地となると展望している<sup>29</sup>。櫻井はさらに、アルタイ山脈（モンゴル語で、「金の山」の意味）は名前の通り金山であると断言し、ロシアはアルタイ山脈の資源に垂涎し、採金事業を着実にすすめており、将来、同地域は東アジアだけではなく世界の金利を左右するところになると指摘している。彼はまた、次のような三つの案を日本政府に提案している。

「第 1 策 清朝ヲシテ独力之カ経営ノ任ニ日本人ヲ雇用スル事。

第2策 日清協同事業トシテ経営スル事。

第3策 阿爾泰〔アルタイ〕山採金事業ヲシテ世界株式会社ト為スコシ、日清両国之レカ發起人トナリ、英米二国ヲ賛成人トナシ、阿爾泰山ノ有望ナルヲ世界ニ広告シ、各国ニ株式ヲ募集スル事」。

清朝政府が第1策を納得できない場合、第2策の実現をのぞむ。これも列強に反対、中傷され、実施が困難となる場合、第3策を執行すればよいというかんがえである<sup>30</sup>。

このほか、3人は外モンゴルの文化、民俗、生活環境などについてもより詳細に述べており、また、モンゴルの台站、交通、通信状況についての記述も非常に重要であり、これらはのちの日本人の探検家にとって重要な情報源となったはずである。さらに、櫻井好孝がえがいた内外モンゴルと新疆が隣接する地域の地図は、当時の行政区画、交通状況を理解するには、きわめて重要である。

#### 4. 鳥居龍蔵の調査

明治時代の外モンゴルに対する日本人の多くの調査のなかで、1908年の鳥居龍蔵（1870～1953年）が外モンゴルで実施した調査が目を引く。彼の調査報告、日記は歴史学、考古学だけではなく、人類学、民族学などの領域の研究においても、きわめてたかい資料的価値がある。

鳥居龍蔵のモンゴル諸民族に関する各調査、記録はすでにひろい範囲で知られ、研究されている。氏は、1908年3月にハラチンから出発し、赤峰、オンニョード左旗（旗はモンゴルの行政単位）、シラ・ムレン川、西ウジュムチン旗をへて、5月下旬に外モンゴル領に入り、当時のハルハ王府、現ドルノド県地域を中心に調査をおこなった。鳥居龍蔵の同地域における考古学、民俗学についての記述はいうまでもなく重要である。例えば、「長城」とされている古い壁に関する考察、礼儀や性格、食文化、生活習慣などの点から、ハルハ人、内モンゴル人とバルガ人の異同についての検討などがある。ここでは、鳥居龍蔵の調査記録と関連して、次の3点について再検討したい。

まず第1に、鳥居龍蔵のハルハ河流域の土地の帰属、およびその住民についての記述を分析しておく。ハルハ河流域の土地の帰属問題は、ノモンハン（ハルハ河）戦争の起因とも関係するため、20世紀以降はよく注目されてきた。鳥居龍蔵は調査日記のなかで、ハルハ河流域の土地の帰属、およびその住民について、より詳細に検討している。最近、細川呉港氏がノモンハン戦争とかかわる地図の研究論文において、鳥居龍蔵の記述を引用しているが、見落とされた重要な点がおおく、また、誤解しているところもある。鳥居は当時、ハルハ河地域をめぐる各国の地図には間違いが多く、同地域は外モンゴルの土地であることは明らかであり、諸外国の地図に同地域を黒竜江省の一部とみなすものがあるのは外交的な目的のためであると指摘している。また、独自の地図をも作成し、出版した調査報告に付録として添付している。鳥居龍蔵の地図に示されている一部の地域は、これら地域の実際の地理的位置と若干ずれているところもあるが、それらの地域はもともとハルハ・モンゴル人の領地であるという指摘は重要である。しかし、細川氏は鳥居龍蔵の地図を重視せず、さらに、鳥居が指摘した外国の誤っている地図を自らの論説の根拠としている。また、鳥居龍蔵は、ドローン・ノールを例に、ハルハ人と内モンゴル人の関係を、黒竜江将軍とハイラル・アンバン（安本）との関係として説明しているが<sup>31</sup>、細川氏は、ドローン・ノールをボイル湖として理解しており、ここに誤認がある<sup>32</sup>。

実際、鳥居龍蔵の地図には、ハルハ河の南の地方はハルハ人の土地、すなわち外モンゴル領として描かれている。鳥居はまた、バルガ人は行政上ではハイラル・アンバンの管轄下に置かれているが、



彼らはハルハ人の領土にすんでいるため、ハルハ王に納税する義務をおっているとし、ハルハ河地域に遊牧しているバルガ人は一時的に、ハルハ王への納税を拒否しようとしていたが、結局のところ、納税をつづけなければならなかった<sup>33</sup>。要するに、歴史上にしろ、当時の現実状況にしろ、ハルハ人はハルハ河の南地域を有していたとする。

第2に、鳥居龍蔵の、イフ・ボルヘンテイやイフ・ラマ・イン・スム、ハルハ廟など仏教寺院と遺跡、年中行事、僧侶についての記述は、チベット仏教の同地域での発展状況、およびその背景となる政治情勢を理解するうえで有益である。ドルノド地域の仏教寺院は、1930年代後半のモンゴルでおこなわれた粛清運動や仏教に対する弾圧運動、さらにノモンハン戦争でかなり破壊されたが、その一部は残されている。2010年9月、筆者が同地域で実施した調査で、イフ・ボルヘンテイなど、鳥居龍蔵の調査記録のなかでのいくつかの事実を確認できたが、今後さらに総合的研究をおこなってきたい。

第3に、鳥居龍蔵のボイル湖およびモンゴル人の漁業に関する記述である。中華人民共和国成立後、ボイル湖をめぐる、モンゴル国と中国の間に紛争はなかったが、これまで、同地域をめぐる両国の地図には若干のくいちがいが存在する。鳥居の地図のなか、ボイル湖は完全にモンゴル領に入っている。また、鳥居龍蔵のモンゴル人のボイル湖での伝統的漁業についての記述は興味深い。例えば、鳥居の記録によると、ボイル湖周辺のモンゴル住民は「此の湖水に産するボロチカの魚を調理して食膳に供す」「彼等の猟漁の方法は、頗る簡単なるものにして、漁師等は单身両端の尖れる独木舟に乗りて湖水に泛び」「舟を自由に前後に動かして湖上を漕ぎ廻る」と記している。鳥居はまた、ボイル湖では「貝類を産す」と指摘しているが<sup>34</sup>、上記の筆者の現地調査では、この点を確認でき、確かにボイル湖には直径15～20cmの貝がきわめて多かった。ボイル湖をめぐる歴史と文化は、こんにちも研究する価値がある。

鳥居龍蔵はのちにも、内モンゴルで調査をおこない、モンゴルに関する著述を出版したほか、1922年には、小村俊三郎、白鳥庫吉、東京外国語学校（現東京外国語大学）のモンゴル人教師ゴムボ・バドマジャブラと一緒に、モンゴルの「地文歴史民族並ニ生活状態等ヲ研究シ、平和人道ノ觀念ニ基キ文化並ニ産業方面ヨリ蒙古民族ノ進歩発達ヲ助ケル」という趣旨で、「蒙古同好会」を組織した<sup>35</sup>。

ちなみに、のちの1925年、南満洲鉄道株式会社の調査隊第2班一行28人が、内モンゴルのバヤン・タラ、西ウジュムチン旗をへて、外モンゴル領に入る道、すわなち1908年に鳥居龍蔵の考察した道と似ている路線を選んで、ハルハ王府にむかったが、彼らは当時のモンゴル人民共和国領内のユクジル廟で逮捕され、外モンゴルでの調査を中止せざるをえなかった。彼らは2ヶ月間余りののちに釈放され、内モンゴルにもどった<sup>36</sup>。

鳥居龍蔵が外モンゴル東部で調査をおこなった同じ年、すなわち1908年、大谷探検隊の橘瑞超（1890～1968年）、野村栄三郎（1880～1936年）が外モンゴルの西部地域で調査をおこなった<sup>37</sup>。よく知られているように、大谷探検隊は1902～04年、08～09年、10～14年に、アジア大陸のひろい地域で調査をおこなった。その第2回目の調査において、橘瑞超と野村栄三郎は外モンゴルでの調査を実施した。ふたりは1908年6月16日に北京から出発し、張家口をへて、フレーにつき、そこからさらに西にむけて、エルデニゾー、カラコルムに到着した。彼らはここで考古学調査をおこなった後、さらに西にむけ、ホブドをへて、新疆に入った。モンゴルの民主化以降、日本やそのほかの国々がモンゴルで調査をおこなってきた。エルデニゾー、カラコルムもその中のひとつである。



## 5. おわりに

以上、明治時代における黒田清隆、草政吉、三浦稔、櫻井好孝、鳥居龍蔵等の外モンゴルでの調査について検討してきた。現代日本の対外関係、特に、対北東アジア諸国の国際関係の形成を理解するには、その基盤となった明治・大正時代の日本の国際戦略を客観的に再検討する必要がある。日本の北東アジア諸国との関係史において、もっとも研究されていないのは、日モ外交史である。それを研究する基礎として、同時代における日本人の外モンゴル調査について、徹底的に整理、分析する必要がある。

明治時代、外モンゴルをおとずれた日本人のうち、黒田清隆、福島安正などのような遠大な展望と見識をもつ政治家、軍人はともかく、草政吉等のようなおおきな志をもつ若者もすくなくなく、また、鳥居龍蔵、橘瑞超と野村栄三郎等の国際的に有名な知識人もいた。彼らの調査からは、当時の外モンゴルの状況だけではなく、政治、軍事、経済、宗教、民俗、文化などひろい分野に亘る、モンゴル地域をとりまく国際情勢をも透視できる。

今のモンゴル国は、ある意味では100年前の外モンゴルと似ている。世界が注目する中、巨大な資源をもつモンゴルは史上空前の大変動期をむかえている。小論が黒田清隆等の調査を研究対象とした理由は、第1に、これまでここでとりあげた明治時代に黒田清隆、草政吉らがおこなったこれら調査はほとんど研究されていない。第2に、彼らが提出したモンゴルにおける鉱山開発、経済開発などに関する開発案はきわめて重要であり、こんにちもなお参考に値する。第3に、彼らの調査と彼らが残した資料をとおして、近代外モンゴルをめぐる内外状況などだけではなく、その時代背景、およびそこを旅した人々のことを知ることも、有益である。これらの資料は、今後、基礎資料として広い範囲で利用されていくと信じている。

## 註

- 1 西村天因編『単騎遠征録』金川書店、明治27（1894）年。
- 2 原山煌「“蒙古風俗”——福島安正からの聞書による19世紀最末期のモンゴル民族誌」『桃山学院大学総合研究所紀要』29(3)、2004年。同「19世紀最末期における日本人のモンゴル観」、松原正毅ほか編『ユーラシア草原からのメッセージ』平凡社、2005年。
- 3 明治41（1908）年、竹中清の調査報告は、「大阪毎日新聞」で掲載され、その翌年に単行本として出版された。竹中翠村『蒙古横断録』青木嵩山堂、明治42（1909）年。林紅子「外蒙横断」『満蒙』昭和17（1942）年10月号～昭和18（1943）年3月号、大連満蒙社。
- 4 田中克彦「大島清庫倫出張報告書」『遊牧社会史探究』第41冊、1969年。
- 5 二木博史「モンゴルに伝わった“鉄道唱歌”」『モンゴリカ』No. 2、1984年。
- 6 Ц. Батбаяр, *Кодама, Мицуй нүүс Хүрээнд байсан япончууд 1911-1921 он*, Улаанбаатар, 1993.
- 7 黒田清隆『環游日記』上編、出版地不明、1887年、pp. 114-16.
- 8 同上、pp. 136-40.
- 9 同上、p. 141, 148.
- 10 同上、pp. 141-50.
- 11 同上、p. 156.
- 12 同上、pp. 160-68.

- 13 同上, pp. 161-62.
- 14 滬友会監修『上海東亜同文書院大旅行記録: 実録中国踏査記』新人物往来社, 1991 年。
- 15 「蒙古辺疆視察員派遣一件 (機密第 24 号)」(自明治 38 年 5 月至明治 40 年 10 月), 日本外務省外交史料館, B-1-6-1-248.
- 16 藤田佳久『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』大明堂, 2000 年。
- 17 春日行雄(『日本とモンゴルの一〇〇年』アジア博物館・モンゴル館, 1993 年, pp. 18-19), 二木博史(“Вэб хуудсанд орсон 1910, 20-иод оны үеийн Монголын түүхтэй холбогдолтой Японы архи Вуудын матэриал”, *Researching Archival Documents on Mongolian History: Observations on the Present and Plans for the Future*, 2004, pp. 58-59) の研究では, 三浦稔らの外モンゴルでの調査にふれている。
- 18 三浦稔『外蒙古視察復命書』外務省政務局, 1906 年, pp. 26-29.
- 19 同上, pp. 35-36.
- 20 同上, p. 21.
- 21 草政吉『外蒙古視察復命書』外務省政務局, 明治 39 (1906) 年, pp. 57-58, 74.
- 22 櫻井好孝『蒙古視察復命書』外務省政務局, 明治 40 (1907) 年, p. 46.
- 23 同上, pp. 20-33, 39-40.
- 24 三浦稔『外蒙古視察復命書』外務省政務局, 明治 39 (1906) 年, pp. 2-3.
- 25 草政吉, 前掲『外蒙古視察復命書』, p. 46. ヤングハズバンドが率いるイギリス武装使節団の侵攻をさせて, 1904 年 7 月ドライ・ラマ 13 世一行はラサを脱出し, 同年 11 月にフレーについた。ドライ・ラマ 13 世は 1905 年 9 月北京に向けて出発したが, その後, ロシア帝国の援助を期待していて, すぐには西寧にすすむことはせず, 最終的にモンゴルを出て, グンブム (塔爾寺) に到着したのは 1906 年 11 月であった(棚瀬慈郎『ドライラマの外交官ドルジーエフ——チベット仏教世界の 20 世紀』岩波書店, 2009 年, pp. 73-79 を参照)。
- 26 草政吉, 同上, pp. 49-50, 72.
- 27 三浦稔, 前掲『外蒙古視察復命書』, pp. 36-37.
- 28 草政吉, 前掲『外蒙古視察復命書』, pp. 51-53, 55-57, 66, 72. なお, 三浦は, 外モンゴルで, (日本ではみられないが) 大阪製の「鼻煙壺」をみかけたとも書いている(三浦稔, 前掲『外蒙古視察復命書』, p. 8)。
- 29 櫻井好孝, 前掲『蒙古視察復命書』, p. 16.
- 30 同上, pp. 48-49.
- 31 鳥居龍蔵『蒙古旅行』博文館, 明治 44 (1911) 年, pp. 299-300.
- 32 細川呉港「ホロンバイル周辺の国境地図の変遷と現実のあいだ」ボルジギン・フスレ他編『ノモンハン事件 (ハルハ河会戦) 70 周年——2009 年ウランバートル国際シンポジウム報告論文集』風響社, 2010 年, pp. 345-46.
- 33 鳥居龍蔵, 前掲『蒙古旅行』, p. 302.
- 34 同上, p. 296.
- 35 「蒙古同好会」日本外務省外交史料館, B-1-3-3-007, 大正 11 (1922) 年。
- 36 南満洲鉄道株式会社庶務部調査課『東部内外蒙古調査報告書 (第 2 班)・第 1 編 一般経済事情』, 昭和 2 (1927) 年, p. 1.
- 37 橘瑞超『新疆探検記』民友社, 1912 年。野村栄三郎「蒙古新疆旅行日記」上原芳太郎編『新西域記』下巻, 有光社, 1937 年, pp. 439-555.

(ボルジギン・フスレ 総合教育センター)